

序章 電腦偽書『ミカエルの誘惑』伝説

■はじめに

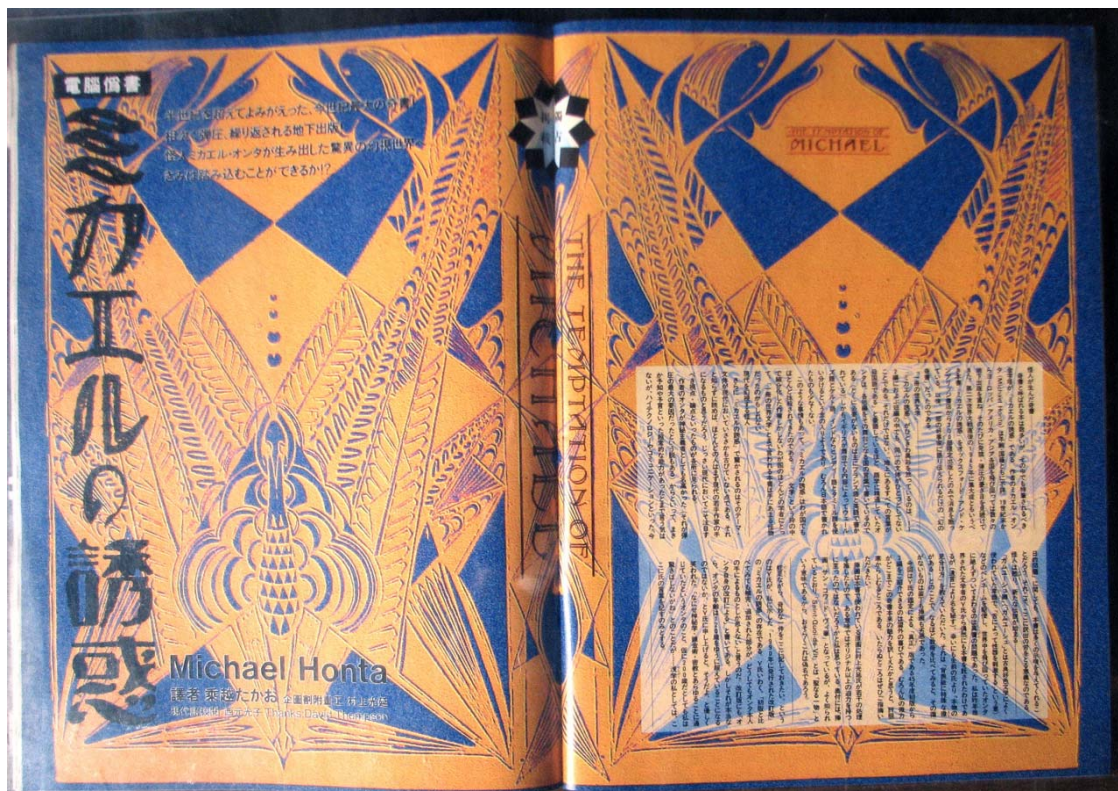
この電腦偽書『ミカエルの誘惑』は、乗越たかおの短編小説集である。

CGアーティストの村上光延氏とのコラボレーションで、最初は1994年の月刊プレイボーイ誌 (NO. 221) で、一挙に3話(「ワッキーのバレンタイン」「沈む都 邪市」「小便小僧になりたい」)掲載された。その後、場所をデザイン誌「スーパー・デザイン」に移して続けられた。

「一話ごとに文体・画風をまるっきり変える」ということを二人の条件として、丁々発止のやりとりが続き、いまだにマニアックなファンから「もう一度読みたい」との要望が寄せられていた。

ので、今回は初出の3話を再掲載する。

残りも順次公開もしくは書籍刊行していきたい。



《序章 ミカエル伝説》

乗越たかお

●怪人が生んだ奇書

奇書と呼ばれる本は数多いが、その中でも特筆されるべき金字塔が『ミカエルの誘惑』である。

作者のミカエル・オンタ (MICHAEL Honta) は年齢国籍ともに不詳。一九世紀末からヨーロッパ・アメリカ・アジア各国を飛び回っては数々の地下出版を重ね、その度に発禁弾圧の憂き目を見続けてきた。第二次世界大戦直後の一九四五年に、集大成ともいべき本書『ミカエルの誘惑』をオックスフォード・アンド・ケンブリッジ書店から三百部限定出版したのみで消息を断っている。

以後、一部の好事家に語り伝えられるだけの「幻の奇書」だったのである。

●「一冊の世界文学」

『ミカエルの誘惑』がひととき異彩を放っているのは、一一二編におよぶ短編の中でも、同一の文体がひとつとしてないことである。それだけではない。

「地上にあるすべての言葉が母国語である」と豪語しているほど語学に精通していたオンタは、各短編をその舞台となる国の言葉で書いているのである（とくに必要がないものは主にフランス語と英語で書かれている）。しかもイギリスが舞台でも内容によつてウェールズ語やケルト語、インドならヒンディ語とタミール語を使い分けるといふ念の入りようであり、むろん日本語で書かれたものも少なくない。

このような事情もあって、『ミカエルの誘惑』はわが国でもほとんど抹殺されてきたのである。「〇〇文学」という枠の中で細分化した作業しかしなわが国のほとんどの学者にとって、「一冊の世界文学」とまでいわれた本書は、手にあまる怪物だったのかもしれない。

●現代を幻視する怪人

さらに『ミカエルの誘惑』で驚かされるのは、そのテーマ・文体が、現代においていささかも古びていない点である。それと知らずに読めば、ほとんどの人はまず現代の作家の手になるものと思うだろう。じっさい現代においてこそ注目すべき視点・論点といったものが各所に見られる。

作者のオンタが神秘主義者としても名高かった（それが弾圧の最大原因だったという説もある）からといって、まさか予知や予言といった超常的な能力があったとまでいう気はないが、ハイテクノロジーやコミュニケーションといった今日の問題に関しても、本書は多くの示唆を与えてくれることだろう。それこそ、ここに訳出の労をとる意義なのである。

●怪人は甦り、新たな伝説が始まる……

「ガムユーシュ卿」（「ガムユーシュ」とは古典好色文学によく使われていた卑語で、「舌によって性器を刺激する」という意）などのペンネームを駆使し、世界中を飛び回っていたオンタに絶えずついてまわるのは、真贋の問題であった。

私は昨年他界された文学者のY氏から（遺言により名を秘す）、偶然にも本書を託されたわけであるが、幸いにも生前の氏より「本物の見分け方」を教えて戴いた。それは「背表紙に特殊な徴がある」とのことで、なるほど数冊を比べてみると、その徴がないものは装丁も挿画も劣悪であった。

今回はY氏の鑑定による「真正版」である四五年度初版から九編をご紹介できるのは望外の喜びである。むろん私の微力がどこまでこの奇書本来の魅力を訳しえたかを思うと、肝胆寒からしむるところではあるが。至らぬところはぜひご指摘いただきたい。

挿画は本書で使われている原画に村上光延氏が若干の処理を施したもので、ある意味ではオリジナル以上の迫力を持つに至ったのではないだろうかとは私は思っている。奥付には「挿画サン＝コワ＝ド＝ヴィ筆」となっているが、よく知られているとおり、「Saint-Quoi-de-Vit」とは「聖なる一物」という意味であるから、おそらくこれも偽名であろう。

蛇足ながら、奇妙な一件をここに記しておきたい。というのはY氏が、私に示した「一九九〇年に発行された改訂版」の『ミカエルの誘惑』の存在である。

Y氏いわく、

「補完追加された部分が、初版と比べてみてどうしてもオンタ本人の手によるものとは思えない」

というのだ。改訂版にも「オンタ自身の改訂による」と書いてある。

しかしそれが本当なら、オンタの年齢は一二〇歳をゆうに越えていることになるのではないか。そうY氏に申し上げると、そうだよ、と優しく笑われた。

「なにせ神秘学、錬金術、密教とあらゆることに通じていたというオンタのこと、仮に二〇〇歳だとしても、私は驚きはしないがね」

とのことだが…… 浅学の私としてはここに氏の言葉を記すのみとする。